

シラヒゲウニの種苗放流 (沖縄市漁協・与那城町漁協)

多和田 真 周

1. 現 状

栽培漁業センターではシラヒゲウニの種苗量産技術開発を昭和59年から実施してきたが、後期幼生期に大量斃死が生じその要因により種苗の生産に支障をきたしていた。しかし、平成4年度から回転式飼育法を取り入れたことにより大量かつ大型種苗の生産が可能となった。今後、栽培漁業センターの施設の拡充が図られると種苗の供給数が増加するものと思われる。

2. 目 的

栽培漁業及び資源管理の推進

3. 協力者

沖縄市漁協・沖縄市役所・南原漁協・与那城町役場・与那城町漁協・水産振興課・水産試験場・栽培漁業センター・中城沿振協

4. 経 過

【沖縄市漁協】

8月15日にシラヒゲウニの種苗放流について、漁協・栽培センター・水試と連絡調整、漁協側は組合員に連絡。

8月17日にシラヒゲウニ(3,887個:平均殻径10mm)の種苗を栽培漁業センターから沖縄市泡瀬漁港まで約2時間陸上輸送、すぐに漁船に移し替え泡瀬地先ウニ礁内に放流した。放流に参加した組合員数は両漁協併せて40名であった。

【与那城町漁協】

H6年3月6日にシラヒゲウニの種苗放流について事前説明会を漁協会議室において、水試島袋研究員・漁協・町役場・組合員の参加により放流に必要な機材・器具・資材の準備確認、放流方法について検討する。

3月18日には事前にホンダワラに付着させたシラヒゲウニ種苗を特製の籠に収容、トラックにより陸上輸送し伊計漁港到着後、直ちに漁船3隻に移し替え、伊計島南地先ウニ礁にシラヒゲウニ(18,208個 11.7mm)を放流した。放流作業に参加した組合員は6名。3月27日は前回同様の輸送方法により、宮城島池味漁港に輸送後、漁船に移し替え宮城島東地先150m沖、水深2mのアジモ場にシラヒゲウニ(3,112個:平均殻径10.7mm)を放流した。なお今回は漁協職員・グループ員3名が参加した。



シラヒゲウニ放流場所のモズク網による稚ウニ付着藻の流失防止作業



輸送用カゴによる稚ウニの輸送